

〈研究ノート〉

幼児の身体表現における外部講師の役割

増田 未来・松岡 綾 葉

（2016年11月17日受理）

要 旨

本研究は、近年増加している外部講師による幼児の身体表現の活動について、先行研究と保育者への質問紙調査から外部講師の役割を考察した。その結果、子どもと保育者、両者に有益な影響を与えていることが明らかとなった。子どもにとっては、外部講師の存在や活動内容から得られる特別感が、活動を楽しむだけでなく普段の生活では見られない新たな一面を引き出すことを可能にしていることが分かった。また、身体表現の指導に困難を感じている保育者が多い現状があるなかで、保育者にとって外部講師の活動に参加することは、指導技術を習得するだけでなく、自らも表現を楽しむ貴重な機会になっていることが示された。加えて、外部講師が行う自由な身体表現活動によって、子どもたちのコミュニケーション力を構築するとともに、保育者が子どもたちの表現の受け止め方について振り返る機会となることが示唆された。

キーワード 外部講師、身体表現、幼児、ダンス、保育

はじめに

平成24年8月に「子ども・子育て支援新制度」が成立し、幼稚園・保育園に加え、現在、就学前の子どもに幼児教育と保育の両方を提供する機能を持つ認定こども園が増えてきている。また、改訂された保育指針・幼稚園教育要領においては、保幼小の連携が重視されたほか、体験の多様性や体験の関連性も重視されるようになった。これらの影響もあり、幼稚園だけでなく保育園や認定こども園においても様々な活動の場面で外部講師が指導する時間を設けている園が増えてきているように感じる。幼児教育において、外部講師が行っている活動としては体育、英語、音楽、漢字、バレエなど様々あり、筆者も実際に保育園に赴き、外部講師として子どもたちと身体表現の活動を4年ほど行っている。幼児の表現教育に携わる筆者の実体験の中で、外部講師が保育においてどのような役割を担っているのか関心が高まった。

体育や音楽の外部講師による活動の報告はいくつかあるが、身体表現の活動の報告は見当たらない。保育指針・幼稚園教育要領の改訂において「表現」の分野では、「表現のプロセスを大切にすること」が加えられたという背景においても、幼児の身体表現において外部講師が活動を行うことに意義があるのではないかと考え、本研究を進めることとする。

目的

本研究の目的は、幼児の身体表現における外部講師の役割を、質問紙調査を通して明らかにすることである。外部講師である筆者の実施する身体表現活動に対して、子ども・保育者はどのように受け止めているのか。本研究を通して、幼児の身体表現の活動における外部講師の役割について論考したい。

研究方法

本研究は、文献研究および質問紙調査によって行った。文献研究は、質問紙調査で保育者の身体表現に対する意識を調査するにあたっての参考とし、また外部講師の活動に関する現状や先行研究を明らかにした。

質問紙調査は、筆者が外部講師として活動を行っている保育園の保育者を対象に調査を行った。調査結果の分析にあたって、園の特色や役職等に影響されないために、質問紙は無記名で行った。外部講師の活動についてどのように考えているのか、子ども・保育者・保護者に見られる変化に関して自由記述式で回答を得た。

1 先行研究の考察

1-1 保育者が抱える身体表現指導の困難さ

外部講師による身体表現活動の需要の背景には、保育者が身体表現活動の指導に関して、苦手意識や困難を感じている背景が挙げられよう。遠藤¹⁾によると、勤続年数6～40年の保育者48名へ行った質問紙調査を考察し、身体表現指導の困難な点を以下の3つにまとめている。

「①言葉かけや子どもの自由な表現を引き出すことの難しさがある。」

「②身体表現の指導・援助の具体的な方法に難しいと感じる点が多い。」

「③その前提として、子どもの発達の状況から育ちの変化が見られ、身体表現指導においては動きたくなる意欲を高める指導が難しい。」

質問紙から得られた114件の記述のうち、66%が身体表現の「指導の難しさ」に分類される回答であった。その内容として、「イメージを膨らませるような言葉かけ」や「抵抗感のある子どもへの言葉かけ」の難しさが多く挙げられていた。②については、そのうちの11%が「教師自身の苦手意識・力量不足感」を感じ、保育のキャリアは積んでも、教材研

究の時間が確保できないことや表現に合ったピアノ伴奏ができないこと等保育者の技能習得が不十分であることが要因として挙げられていた。

幼稚園教育要領および保育所保育指針の「表現」のねらいで定められているように、子どもの豊かな感性や表現力の獲得を援助する為に必要な要素を備える身体表現であるが、遠藤においても「保育者の多くが問題を抱えながら実践している」²⁾との記述があり、多くの保育者が困難を感じている現状がある。高橋³⁾では、外部講師の活用による授業効果にいち早く注目し、小学校におけるダンス授業のプログラムを開発した研究において、同様に教員の経験の少なさ、自信の無さを指摘している。これらの課題解決のためには、保育者自身の苦手意識克服の為に教材研究が必要であるが、多忙を極める保育者にそのような時間の確保は難しい。その打開策として、専門性を備えた外部講師による指導は、子ども・保育者双方にとって有効であるのではないだろうか。

1-2 外部講師による保育活動の現状調査と外部講師の割合

次に、国内における幼稚園・保育所の外部講師による保育活動の現状を調査した。

ベネッセ教育総合研究所⁴⁾では、回答のあった全国の私立幼稚園・保育所、公立幼稚園・保育所5,221園における「体操」・「音楽活動」・「ひらがなの読み書き」・「数、計算の練習」・「英語」の通常保育時間内の各活動における指導者について、保育者・外部講師の区別が調査されている。当調査ではダンス・身体表現の区分は無かったが、近接領域である「体操」は他の活動に比較して最も外部講師の割合が多く、私立幼稚園では、78.4%、私立保育所では62.8%にも上った。このように、身体活動を主とする活動では、専門性を備えた外部講師の必要性が高いことが明らかとなった。

また、特に私立幼稚園では近年の保育所利用の増加に伴う園児確保の対策として、外部講師による活動をストロングポイントとして打ち出していることが予測されていた。

1-3 外部講師による保育活動の役割

多くの保育の現場で取り入れられている外部講師が、どのような効果をもたらしているのか。本研究の最も核心に迫った先行研究調査であるが、坂本⁵⁾は、90園の私立・公立幼稚園の外部講師による保育活動の事例を調査し、保育者・外部講師からの聞き取り調査を行ったものである。当該研究においてもダンス・身体表現を対象とした調査ではないものの、「体育的活動」は私立幼稚園の94.7%が取り入れており、継続的な展開をしている。

保育者からの聞き取り調査では、外部講師による活動を経験することで、子どもたちが「身体の動きが良くなった」、「元気に外遊びをする」、「お話を良く聞くようになった」⁶⁾等、ポジティブな効果が得られ、また保育者自身も「指導者の姿を見て参考になる」等、保育者自身の学びとなっていることが明らかとなった。また、体育的活動においては、「より専門的な指導者が、そして男性指導者の活発な力強い面が望まれている」⁷⁾とあり、園の保育者では達成できないと思われる高度な専門性が求められていることが示唆されている。

一斉保育における外部講師による身体表現の実施状況についての資料・先行研究は無いも

の、先に挙げた外部講師の小学校ダンス授業の開発・普及に関して研究している高橋るみ子の一連の研究では芸術家による表現教育の考察がなされている。小学校においても学習指導要領の中に「身体表現」「創作ダンス」があり、保育の身体表現とそれらのねらいは類似していると考えられる。高橋の研究は小学校をフィールドにしたものであるが、本研究における貴重な先行研究と言えるだろう。高橋⁸⁾では、高度な専門性を備えた外部講師について以下のように述べられている。

「芸術家等の表現活動の専門家は、子どもたちのグループ活動において、他者認識や自己認識を助け、コミュニケーションを促進させたり（ファシリテーターとしての専門家）、非言語コミュニケーションや即興的に対応したり（クリエイターとしての専門家）することによって行っている。」

また高橋⁹⁾では、芸術家が作成した学習プログラムによって、「指導者の固定概念を崩すような気づき」を誘発し、一中略— 学習者（子ども）とダンスの世界を拓くことができる力を培う」ことができると考察している。このように外部講師による保育活動によって、子どもたちは身体表現の世界により親密に触れることができ、感性・表現力を育むことに寄与していることがわかる。

外部講師による教員への効果として、高橋¹⁰⁾では、外部講師からの刺激を受けて「これまでは創作ダンスに興味・関心を示さなかった、あるいは示す必要性を強く感じていなかった教員が、身体表現や創作ダンスに目を向ける・向けざるを得なくなるのではないかな。あるいは、リズム系のダンス一辺倒になりつつある教育現場において、創作ダンスの特性を再認する教員が増えるのではないかな。」と述べている。このように、子どものみならず教員・保育者に対しても外部講師の効果は高いことが明らかとなった。

以上の先行研究の調査から、幼稚園や保育園において身体表現と同様に身体活動を主とする体育的活動について、専門性を有する外部講師には重要な役割があることが示唆された。また、小学校教育の現場においては、身体表現の授業で外部講師が指導する意義が明らかとなった。このことから、幼児の身体表現の活動においても同じように外部講師の役割や意義があるのではないかと考えられる。具体的な意義や役割を明らかにする為に質問紙調査を実施することとした。

2 質問紙調査

2-1 質問紙調査方法

以下の概要で質問紙調査を行った。

- 1) 筆者が外部講師として活動を行っている私立保育園3園において、外部講師の活動に参加したことのある保育士（園長・主任・担任を含む）17名（内訳はA園6名、B園5名、C園6名）を対象に質問紙調査を実施した。回答方法は自由記述法を用い、無記名での回答の協力をお願いした。この調査ではできるだけ保育者自身の生の声を聞き入れて実態を調査するため、記述式の回答方法を取り入れた。

- 2) 調査時期 平成28年9月
- 3) 調査対象 園長・主任・担任を含む保育士17名（内訳はA園6名、B園5名、C園6名）
- 4) 調査内容

- 1 身体表現の指導を難しいと感じる点
- 2 身体表現を外部講師が指導することで見られた子どもの変化
- 3 身体表現を外部講師が指導することで見られた保育者の変化
- 4 身体表現を外部講師が指導することで見られた保護者の変化
- 5 身体表現を外部講師が指導することで感じた今後の課題

5) 外部講師が担当する活動の内容について

調査対象の保育園で指導を行う外部講師は、大学・大学院修士課程で舞踊学を専攻し、保育園や幼稚園で約5年ほど身体表現の指導経験を持つ。また、自らも振付者やダンサーとしてコンテンポラリーダンスの公演を年に数回行っており、身体表現の分野において専門性をもっていると言える。

調査対象の保育園では4年前から身体表現の活動を始め、現在も続けている。対象は主に3歳児、4歳児、5歳児とし、各年齢ごとに約30分の身体表現の活動を月に1～2回行っている。場所は園によって様々だが、一番広い保育室で行う場合が多く、普段子どもたちが生活している部屋と同じである。内容は、準備体操を含めたストレッチから始まり、身体の発達に合わせた体育的な活動や講師が考えた振付のダンスを行うこともあるが、主活動としては子どもたちが自分で動きを考えたり、創造の世界に没入して身体を動かす、子どもが自由に身体を使って表現することに重きをおいている。その際、子どもたちが自ら考えて表現するというプロセスを大事にしているため、子どもたちが考えて表現したことは否定せず、全て受け止めることを大切にしている。また、身体の動きが多様にあることを伝えるため、常に自らも動き、様々な身体の動き・表現を見せることも意識して行っている。

2-2 質問紙調査結果

1 身体表現の指導を難しいと感じる点

質問1では、身体表現の指導を難しいと感じる点について自由記述式でたずねた。得られた各回答から共通する内容を抽出し、表1のようにカテゴライズを行ったところ、得られた回答は以下の3つに集約された。

5

(1) 自らが身体表現を行うことが苦手であるため（表1-①）

「自分に自信がないので」や「私自信が得意ではないので」、「自分自身リズム感がないため苦手です」など、保育者自らが身体表現を行うことが不得意であることが、身体表現の指導を難しく感じる理由の一つであることが分かった。

（2） 自由な表現を導く言葉かけや指導が難しい（表1－②）

「振りが決まったものであればできるが、自由な表現は子どものイメージが膨らむような働きかけが必要」「決まった振り付けを教えるのはどうにかできるのだが、自由表現が苦手である」「自分に知識がなく、子どもの自由な発想や表現する事を制限してしまいそう」など、自由な表現へと導く身体表現の活動において、言葉かけなど、どのように誘導・指導していくのかが分からないという点が、身体表現の指導を難しく感じさせていたことが分かった。

（3） 不得意な子への対応が難しい（表1－③）

「ダンスや身体表現が苦手な子どもに対しての助言（アドバイス）が難しく感じる」「不得意な子への教え方、いつも「大丈夫」と励ましているが難しい」など、身体表現を苦手・不得意と感じる子どもへの対応が難しいことが、身体表現の指導を難しく感じさせていたことが分かった。

以上の結果は、遠藤（2006）の考察内容と類似した結果となった。つまり、身体表現指導の困難さの背景として、保育者自身が身体表現に苦手意識を持っていること、身体表現の保育技術不足を感じていることの2点が挙げられることが明らかとなった。身体表現の保育技術不足については、自由な表現の指導に関する技術と身体表現が不得意な子どもへの指導に関する技術について技術不足を感じており、これらの技術不足が身体表現の指導を難しく感じさせると考えられる。

表1 身体表現の指導を難しく感じる点

① 自らが身体表現を行うことが苦手であるため	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分に自信がないので ・ 自分で行うことが不得意なのであまり好きではない ・ 私自身が得意ではないので手本になることが苦手 ・ 自分自身リズム感がないため苦手です ・ 私自身、ダンスや身体表現をすることが楽しいと思えないので、子どもたちと一緒に踊ることもあまり楽しく感じられない。楽しくないから難しく感じるのかもしれませんが
② 自由な表現を導く言葉かけや指導が難しい	<ul style="list-style-type: none"> ・ おゆうぎ等、振りが決まったものであればできるが、自由な表現（何かになりきったり……）は子どものイメージがふくらむような働きかけが必要 ・ 自分に知識がなく、子どもの自由な発想や表現する事を制限してしまいそう ・ 決まった振り付けを教えるのはどうにかできるのだが、自由表現が苦手である
③ 不得意な子への対応が難しい	<ul style="list-style-type: none"> ・ ダンスや身体表現が苦手な子どもに対しての助言（アドバイス）が難しく感じる ・ 不得意な子への教え方→いつも「大丈夫」と励ましているが難しい

2 身体表現を外部講師が指導することで見られた子どもの変化

質問2では、身体表現を外部講師が指導することで見られた子どもの変化について自由記述式でたずねた。得られた各回答から共通する内容を抽出し、表2のようにカテゴライズを行ったところ、以下の（1）から（4）の下位項目が明らかとなった。

（1）特別な時間という意識から、活動をととても楽しみにしている（表2－①）

「担任ではない講師の方に楽しい事をやってもらい、その日を楽しみにしている」「その時間中に楽しんでいる、夢中で行っている」「講師の先生に教えてもらえるので、その日を楽しみにするようになった。」「普段とは違う事をとても喜んでいた」など、毎日保育園にいるわけではない外部講師という存在と、普段の生活では行わないような活動内容から感じられる特別感が、活動を楽しみにさせ、子供たちを夢中にさせていることが分かった。

（2）普段見られない、新しい姿が見られた（表2－②）

「女兒はこの時間堂々とした姿が見える子も多く、3歳児も外部講師の話をしっかり聞こうとする姿があり」「始めの頃は『休憩』と言って抜けていた子も回を重ねるごとに最後まで楽しんで参加するようになった」「クラスの中での活動の時とは違う姿がみられたりする」「外部講師との信頼関係が芽生えることで、職員とは違った甘え方をしている」など、外部講師の存在や、外部講師が行う活動がもたらす特別感によって、普段とは違う子どもの姿が見られることが分かった。集中して話を聞く姿や、堂々とした姿など、普段よりもしっかりとした姿が見られることが多い。

（3）ダンスや自由な身体表現が身近になった（表2－③）

「自然と身体での表現も出やすくなっていると思います」「自由遊びの時間にも動物のマネをしたり」「表現する面白さや身体を使って遊ぶ楽しさを実感し、自由な表現力が付いていると思います」「様々な体の使い方を覚えて、室内あそびの時に子ども同士で見せあう姿がある」など、外部講師が実際に活動をしている時間だけではなく、普段の保育の中で、身体を使った表現が子どもたちにとって身近になっているということが分かった。外部講師の活動を通して、子どもたちが日頃から積極的に身体で表現するようになったことが明らかになった。

（4）自分の意見を伝えられる子どもが増えた（表2－④）

回答数はそれほど多くないものの、「子どもが積極的に意見を言うようになった」「自分の考えを表現する、他人に伝えられる子が増えた」など、外部講師の活動の中で子どもたち自らが考えたことを身体で表現する活動を行っているため、自分の意見を伝えられる子が増えたことが分かった。

以上の結果について、（1）（2）は坂本（2001）でみられた結果と類似していると言える

だろう。外部講師という存在と普段の生活とは違う活動内容という特別感が活動を楽しみにさせ、また、子どもたちに普段は見られない新しい姿をもたらすことが明らかとなった。また、（３）（４）については、身体で表現するという活動の特異性によってもたらされた変化であると言えるだろう。

表２ 身体表現を外部講師が指導することで見られた子どもの変化

① 特別な時間という意識から、活動をとっても楽しみにしている	<ul style="list-style-type: none"> ・ 毎月とても楽しみにしています ・ 普段とは違った先生という特別感や期待感を抱く子が多い ・ 単純にその時間中に楽しんでいる、夢中で行っている ・ 担任ではない大人が遊びを伝えていくことによって、普段とは違う事をとても喜んでた ・ 担任ではない講師の方に楽しい事をやってもらい、その日を楽しみにしている ・ 子どもたちは期待を持ち、楽しみにしている ・ 講師の先生に教えてもらえるので、運動あそびの日を楽しみにするようになった ・ 運動あそびの日を楽しみにしてる様子が伺えた
② 普段見られない、新しい姿が見られた	<ul style="list-style-type: none"> ・ 女兒はこの時間堂々とした姿が見える子も多く、３歳児も外部講師の話をしっかり聞こうとする姿があり、特別な時間になっています ・ 始めの頃は興味のある部分には積極的に参加して、それ以外は「休憩」と言って抜けていた子も回を重ねるごとに最後まで楽しんで参加するようになった ・ クラスの中での活動の時とは違う姿がみられたりする ・ 緊張感を持って、集中して活動する、できるようになる場面が増えた ・ 外部講師との信頼関係が芽生えることで、職員とは違った甘え方をしている ・ 身体を使って自由に表現することが苦手な子も次第に表現する楽しさを知り、参加している姿が見られた ・ 戸外あそびの中では見られない、子どもの成長を見る事ができた ・ 子どもたちの普段見られない面を引き出してもらっている
③ ダンスや自由な身体表現が身近になった	<ul style="list-style-type: none"> ・ 運動能力ではなく、表現する面白さや身体を使って遊ぶ楽しさを実感し、自由な表現力がついていると思います ・ 普段の会話の中でジェスチャーが大きくなったり、活動で行った時の動きで伝えようとする姿が増えたように感じます ・ 自然と身体での表現も出やすくなっていると思います ・ 何かになりきって表現しようとする子が増えてきた ・ 自由遊びの時間にも動物のマネをしたり、クラス活動で行う体操にも全員が楽しそうに参加していた ・ プール遊びの際、フープをくぐる練習で、表現遊びで行ったような動物になりきって遊んでいた ・ 様々な体の使い方を覚えて、室内あそびの時に子どもたち同士で見せあう姿がある
④ 自分の意見を伝えられる子どもが増えた	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の考えを表現する、他人に伝えられる子が増えた ・ 音楽に合わせて自由に表現することで、子どもたちが積極的に意見を言うようになった

3 身体表現を外部講師が指導することで見られた保育者の変化

質問3では、外部講師の身体表現を通して保育者自身にどのような変化があったのか、自由記述による回答を得た。4つのカテゴリーに分け、表3に表した。

（1）身体表現指導の技術の習得（表3－①）

「講師の行う導入方法や、歌、あそびを保育の参考にさせていただいた」「保育士たちのあそびのスキルや、引き出しが広がり、講師にやってもらった事をきっかけに、日常の保育に導入して」「子ども達の興味を持続させるスキルを勉強させていただきました」など、一緒に活動に参加する保育者にとっては、身体表現の指導に必要な技術の習得や、身体表現の活動例の参考になっている事が分かった。これらのカテゴリーの回答が最も多く、保育者が外部講師の活動に参加することで、自身の保育活動にどのように活用できるかという点に興味関心を持っていることが分かった。

（2）子どもへの向き合い方の再確認（表3－②）

「子どもたちの自由な発想や表現しようとする気持ちを、いったんは受け止める、理解を示すという担当講師の方の姿勢は一保育士にもとても大切なことだと再確認した」「子ども達の意見を引き出し、全てを受け止めながら進めてくださっており、……自分の普段の保育を見直すきっかけにもなりました」など、身体表現の活動だけではなく、普段の保育においての子どもたちとの向き合い方について刺激を与えたり再認識するきっかけとなっていることが分かった。

子どもの表現をまるごと受け止めることは、多くの保育者が保育において最も重要視すべきこととして認識していることである。保育者は、外部講師が子どもたちの自由な表現を受け入れ、活動を展開している様子を目の当たりにすることで、「受容する」という保育の基本について今一度原点に立ち返り、自身の保育を見直すきっかけとなっていることが明らかとなった。

（3）保育者自身が表現を楽しむ時間となっている（表3－③）

「子どもたちの豊かな発想を引き出し、楽しんでいる姿を見て、こちらも楽しくなり、自然に身体が動くようになった」「自由に身体を動かし、自由に表現する楽しさを味わえた」など、保育者自身が身体表現の楽しさに気づいたり、子どもたちと身体表現を楽しむ時間となっていることが分かった。通常の保育においては、子どもたちと同じ目線で十分に楽しむことが困難なこともあると考えられるが、外部講師の活動では子どもたちと一緒に楽しむことができ、リフレッシュをしながら子どもへの新たな気づきをもたらしていることが明らかとなった。

表3 身体表現を外部講師が担当することで見られた保育者の変化

① 身体表現指導の技術の習得	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの声を拾い、表現を共有していく大切さを思い出しました ・ 身体表現の授業で学んだことを現場でこう活かしたらいいんだと、考えさせられています ・ 講師が行ったカリキュラムから普段も表現できそうな動きを保育の中に取り入れる ・ 講師が来た時の活動内容を知らせる意味で始めた運動会の準備体操が定番になりました ・ 授業の始めに行っているストレッチ・挨拶など活動のなかに取り入れ、なるべく継続してできるようにしている ・ 講師の行う導入方法や、うた、あそびを保育の参考にさせて頂いたり、同じ様に取り入れると、子供たちは覚えていていつの間にか参加して喜んでた ・ 見本となる人が元気よく行うことで楽しさが子どもに伝わるのがよく分かった ・ 私自身もそうですが、保育士たちのあそびのスキルや、引き出しが広がり、講師にやってもらった事をきっかけに、日常の保育の導入にしてもらったり ・ 子ども達の興味を持続させるスキルを勉強させていただきました ・ 自分が楽しく踊っていることで、子どもたちも笑顔になり、一緒に身体を動かしてくれるのだと思った ・ 表現方法は人それぞれで、こんな表現、踊りがあるんだと勉強になった ・ 普段の保育の中でも同じように取り入れたり、音楽に合わせて体を動かす際の、子どもへの伝え方や参加できない子への誘いかけ方などとても参考になり、取り入れていこうと感じた
② 子どもへの向き合い方の再確認	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもたちの自由な発想や表現しようとする気持ちを、いったんは受け止める、理解を示すという担当講師の方の姿勢は一保育士にもとても大切なことだと再確認した ・ 子どもをできるだけのびやかな気持ち、リラックスした状態にさせるという時間も大切であるとあらためて感じた。→保育に活かせる場面で活かしたい ・ 自分の普段の保育を見直すきっかけにもなりました ・ 子どもの発想を自然と引き出せるような問いかけの仕方を、講師の先生の授業の中でヒントをもらい、日々の保育を行っている ・ 月1・2回の実施ではあるが、外部の先生に職員も子どもたちも刺激を受けている
③ 保育者自身が表現を楽しむ時間となっている	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもたちの豊かな発想を引き出し、楽しんでいる姿を見て、こちらも楽しくなり、自然に身体が動くようになった ・ 自由に身体を動かし、自由に表現する楽しさを味わえた ・ 普段は大人（担任）同士と一緒に活動せず、次の準備や別の子の保育をする事が多い中、クラスの子どもたちの様子をじっくりみることができ、良かった

10

4 身体表現を外部講師が指導することで見られた保護者の変化

質問4では、保護者に見られた変化について自由記述で回答を得た。大きく2つのカテゴリーに分け、以下表4に表した。

（１） 保護者も楽しみにしている（表４－①）

「この日を楽しみにしていますと伝えてくれた」「保護者の方も楽しみにしているようです」など、子どもたちと同様に保護者も楽しみにしていることが分かった。また、「保護者は外部講師が来て、指導する事をとても喜んでいる方が大きい子を中心に何人もいます」という回答もあり、大きい子つまり幼児の保護者は、外部講師の指導をポジティブに受け入れていることが分かった。

（２） 子どもと保護者との会話の材料になっている（表４－②）

「帰りに『先生と今日は何したの？』という会話を子どもとしている保護者がいる」「『今日は先生が来る日だね』と子どもに親が伝えていた」など、外部講師の活動が、保護者と子どもの会話の話題となることが分かった。このように、親子間のコミュニケーション促進の一助となっていることが示唆された。

表４ 身体表現を外部講師が担当することで見られた保護者の変化

① 保護者も楽しみにしている	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子ども達からも家庭で話しているようで、保護者の方からの楽しみにしている声が多く聞かれます ・ 「明日は先生の日だから早く来ます」とか楽しみにしている様子が伺えます ・ 保護者は外部講師が来て、指導する事をとても喜んでいる方が、大きい子を中心に何人もいます ・ 保護者の方も楽しみにしているようです ・ 運動あそびの日は、休ませたくないようで、日にちの変更を知らせなかった時に、「分かり次第、知らせてほしい」との要望があった ・ この日を楽しみにしていますと、伝えてくれた
② 子どもと保護者との会話の材料になる	<ul style="list-style-type: none"> ・ 帰りに、一日の活動の掲示を見て、「先生と今日は何したの？」という会話を子どもとしている保護者がいる ・ 「今日は先生の日だね」とか子供に親が伝えていたり ・ 子どもから家庭で「楽しかった」という話を聞く、という反応 ・ 家庭でも日中にやった事をやってみせたり、保護者にやった事を話したり、とても楽しみにしているなどという声が多く聞かれる

５ 身体表現を外部講師が指導することで感じた今後の課題

質問５では、外部講師による活動の課題について自由記述で回答を得た。この外部講師の課題に対する質問・考察は先行研究では見当たらず、本研究独自の試みである。結果、課題として「頻度」・「継続性」・「参加しない子やトラブルが起きた時の対応」の３項目に分けられ、表５に表した。

（１） 頻度（表５－①）

回答数は少ないものの、いずれも「週１」程度の活動が望ましいと考えていることが分かった。

（2） 継続性（表5－②）

「継続性が課題だと感じます」「保育士が真似をして、身体表現の活動を行うなど頻度を上げていく必要がある」「やってもらって終わりではなく、引きついで普通のクラスにどのくらい入れていけるか」など、外部講師が行った活動を普段の保育にどう取り入れて継続して行っていくかを課題と感じている保育者が多いことが分かった。

高橋（2012）の小学校における先行研究と比較して異なるのはこの点であろう。小学校教員よりも保育者の方が自身の保育にどのように繋げていくことができるかを重視していることが明らかとなった。単元ごとの独立性が強い小学校カリキュラムに比べ、保育では前後の活動のつながりがより重要視されるためであろう。

（3） 参加しない子やトラブルが起きた時の対応（表5－③）

「すぐに抜けてしまう子に対しての対処の仕方」「参加できない子・トラブルで泣き出した子など職員の対応の仕方が様々でどのような対応が望ましいのか」など、参加しない子やトラブルが起きた時に、どのように対応したら良いのかを今後の課題としている保育者が多いことが分かった。

表5 身体表現を外部講師が担当することで感じる今後の課題

① 頻度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 月に一回だと、どの程度子どもに影響があるのか、というのは見えにくい ・ もっと来て頂けたら（月2～4の週一でできたらいいなって感じている）
② 継続性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保育士が真似をして、週一度は身体表現の活動を行うなど頻度を上げていく必要がある ・ 継続性が課題だと感じます ・ 普段の保育でも同じように出来る部分は取り入れ、授業の中で体験したこと、教えて頂いたダンスなど、その場限りにならないようにしたいと思っています ・ 担任がやってもらって終わりではなく、引きついで、普通のクラスにどのくらい入れていけるかだと考えています ・ 講師に任せきりになっている。通常保育の中に学んだ事を取り入れて欲しい
③ 参加しない子やトラブルが起きた時の対応	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「やらない」と言ってすぐに抜けてしまう子に対しての対処の仕方 ・ 参加できない子・トラブルで泣き出した子・興奮しすぎて中断させてしまう子がいる。その場合、職員の対応の仕方が様々なので、どのような対応が望ましいのか ・ 楽しんで参加しながらも、けじめのある態度でやってほしいと思うが、子どもたちがふざけすぎでしまったり、話を聞いていなかったりという姿が目立つ時があるので、そういう時の対応がこれからの課題だと感じています

考察

以上の先行研究および質問紙調査結果を通して、幼児の身体表現において外部講師が果たす役割を、以下の2点と考察した。

まず一つ目は、外部講師すなわち、身体表現の分野における専門家が来て活動を行うということが、子どもと保育者両者に有益な影響を与えるという点である。子どもたちにとっては、普段とは違う大人、すなわち日頃から共にいる保育者ではない大人が、普段の生活・保育とは違う内容の活動を行うことで、その存在と活動に特別感が生まれ、単純に活動を楽しむ他に、普段の生活では見られない子どもの新たな一面を引き出すことができるということである。さらに、子どもたちの変化として、身体表現を通して自分の意見を伝えるようになったことから、コミュニケーション力が構築され、言葉による自己表現や他者受容ができるようになったのではないかと考える。保育者にとっては、特に身体表現の指導に難しさを感じている保育者にとって、身体表現指導の参考となる有意義な時間となっていることが分かった。先行研究でも指摘されていた通り、苦手意識を持つ保育者の多くは、身体表現の指導技術を十分に習得できていないのが現状である。子どもたちと一緒に保育者が身体表現の活動を行うことによって、子どもたちが表現を楽しむ時間を共有し、自らも子どもと共に身体表現を楽しむ時間となり、子どもたちのみに留まらず、保育者にとっても貴重な学びの場であると言える。

次に、二つ目として外部講師が行う内容のうち、自由な表現を含む活動を行うことに大きな意義があると言える。上述した子どもたちの変化のうち、言葉による自己表現や他者受容ができるようになったのは、身体を通して自分の意見や考えを表現する活動を繰り返し行ったことが大きく影響していると考えられる。言葉が発達途中の子どもたちにとって、身体を用いて自分の考えを表現し他者に伝えること、また他者の表現を受け入れることはコミュニケーション力の構築において重要であると言える。また、保育者にとっても外部講師が自由な身体表現の活動を行うことは指導の参考となるだけでなく、普段の保育での子どもたちへの向き合い方の振り返りをもたらししていることが分かった。これは、子どもたちの表現を一度全て受け止めるという外部講師の指導方針が影響していると考えられる。日常の保育においても子どもの声を全て受け止めるという考え方は最も重視すべきことであると言われているなか、外部講師の指導の様子から普段の保育の子どもへの受け止め方について振り返る機会となることは、大変有意義であると考えられる。

13

まとめ

以上のように、外部講師が身体表現の活動を担当することで、子どもにとっても保育者にとっても大きな影響を与えることが分かった。しかし、外部講師の活動をより良い時間とす

るためには、まだまだ課題が多くあることも明らかとなった。保育者が感じる今後の課題でも上述したように、外部講師が行って終わりではなく、日常の保育に活動の内容を取り入れていくこと、また不得意な子やトラブルが起きた時の対応についても改善点が挙げられる。どちらの点についても、活動の中身だけでなく活動の前後に関しても、外部講師と園とでの打ち合わせを行い、連携を強くすることが重要であるように感じる。より良い活動を行うためには、活動の前に日常の子どもたちの様子や保育者が求めることなどを聞いた上で、不得意な子や苦手な子への対応の仕方について話し合い、外部講師と保育者とで認識を同じくしておく必要がある。また、活動後も保育者が継続して行えるようにアドバイスするなど外部講師が子どもたちに与えた刺激を、日々の保育へとつなげられるようにすることが必要であると感じた。

また、調査によって、保育者が日々の保育でも身体表現を継続して行いたいと感じている反面、身体表現の指導に難しさや自信のなさを感じているという点から、保育者養成校で行う「身体表現」の授業内容に課題があると考えられる。「身体表現」は幼稚園教諭免許取得のための必修科目である。保育士免許取得においても保育内容表現に関する授業は必須である。学生時代に、自らの身体表現に自信を持たせ、不得意な子への対応方法や言葉かけ、決まった振付のダンスだけではなく自由な表現を含む身体表現の活動への指導技術を身につけることが必要である。養成校における「身体表現」の授業についての研究は既に多くの先行研究があるが、今後は本研究で得られた知見も取り入れつつ、身体表現の指導を円滑にできる保育者養成のあり方を探っていきたい。

今回の研究では、自らが外部講師として行う活動についての調査を行ったため、自らの活動についての現状や課題を知ることができ、今後の活動につなげていきたいと思う。しかし、自らが行う活動についての調査であったため、被験者から否定的な回答が得にくかったのではないかと考えられる。また、サンプル数も少なく、活動内容についても筆者の行う身体表現の内容に関する回答しか得られていない。幼児の身体表現における外部講師が果たす役割について考えるためには、本研究を予備的研究とし、様々な外部講師が行う身体表現活動について調べていく必要があると考える。

今後も、保育園・幼稚園・認定こども園など多様な園の中での特色作りとして、外部講師という存在が増えていく可能性がある。外部講師の存在が一時の楽しみだけで終わらないように、本研究を継続していきたいと思う。

引用文献

- 14 1) 遠藤晶「幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について」『武庫川女子大学紀要』54号、2006、p.76
- 2) 前掲¹⁾、p.93
- 3) 高橋のみ子「コミュニケーション能力の向上を目的としたダンス教材の開発—ダンスの芸術表現を用いたコミュニケーション能力の育成に資する取組の推進—」『宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要』、2016、p.21-32
- 4) ベネッセ教育総合研究所「第2章 保育・教育的な活動」『第2回 幼児教育・保育について

の基本調査 報告書』ベネッセ教育総合研究所、2012、p.50-54

- 5) 坂本勝江「幼児教育における外部講師による体育的活動の現状について」『茨城女子短期大学紀要』28号、p.118
- 6) 前掲⁵⁾、p.108
- 7) 前掲⁵⁾、p.107
- 8) 高橋るみ子「芸術家とのかかわりから生まれるもの」『女子体育vol.54』、2012、p.16
- 9) 高橋るみ子「アーティストが創るダンスの授業」『宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要』16号、2008、p.22
- 10) 前掲²⁾、p.31